

『マハーマーヤー・タントラ』の成立に関する一考察

——仏教タントラとヒンドゥー神話の関係性をめぐって——

大 観 慈 聖

1. 序論 14 世紀頃に活躍したチベットの学匠プトウンの仏教タントラ分類法に従えば、*Mahāmāyātantra* (= MMT = re-Skt.[MMT&Gu]/P : No.64)¹⁾ は無上瑜伽タントラに属し、その中でも般若・母タントラ系の聖典とされる。ターラナータの仏教史によれば、ククリパが MMT を普及した。事実、チベット大蔵経中に彼の作品を求めれば、MMT 関連文献が過半数を占めている。また、母タントラを最高の密教と考えたアティシャも『菩提道灯自註』に MMT を代表的タントラの一つとして挙げている。MMT には四つの註釈が存在するけれども、なかんずくサンスクリットが現存し、充実した内容を有する *Guṇavati* (= Gu = Skt.[MMT&Gu]/P : No.2495) が重要である。Gu は 10 世紀後半～11 世紀前半頃に活動した六賢門の一人、Ratnākaraśānti (= R) 作とされる逐語訳であり、本稿でも言及する最重要文献である。『八十四成就者伝』に伝記が残されている R とククリパは、マハーマーヤー系の著作の内容的近似性から同じ伝統を共有する同時代人と考えられている ([森] p.26)。

2. MMT MMT は、Gu の冒頭偈において「非常に軽い」(atilaghu) と形容されているように、小規模のタントラであり、「ヨーガの自在者である大明妃による悉地の特徴の説示という第 1 章」, 「ヨーガの自在者である大明妃によるヨーガの確定という第 2 章」, 「大金剛瑜伽女たちの密意である「最高の秘密」にして「大いなる秘密」という儀軌を伴った成就法という第 3 章」の全 3 章で構成されている。MMT 第 3 章の章題に対する Gu の「初めに「最高の秘密」(paramaguhya) と言われ、終わりにそ〔の「最高の秘密」〕と同じ「大いなる秘密」(mahāguhya) というシノニムで言われるマハーマーヤーという名前をもつタントラ」という記述から、MMT が Paramaguhya と Mahāguhya という二つの別名を有していたことがわかる。前者について付言すれば、MMT:1.3. における R の註釈から、Paramaguhya という名称は省略形であり、MMT の正式名称は「金剛ダーキニー〔たち〕の最高の秘密」(Vajradākīni-paramaguhya) であることがわかる。また、R は MMT:1.21. に対す

る註釈において、MMTを「現観を著しく略説したもの」とも言っている。MMTは、金剛ダーキニーたちへの帰敬偈(MMT:1.1.,1.2.)の後、MMT:1.3.から「さて」(atha)という語で始まる²⁾。Rは「こ〔のMMT:1.3.〕の「さて」という語は、先のタントラ(=根本タントラ)に依存して、このタントラ(=MMT)の連続性をほのめかしている」とし、同じく「さて」(de nas)で始まる『金剛頂タントラ』を先例として挙げているけれども、MMTが根本とするタントラが何かということは具体的に明かしてはいない。しかしながら、RがMMTを釈タントラ(ākhyātatantra)、あるいは続タントラ(uttaratantra)の類と考えていたことは間違いない。

3. MMTとDM(=Devīmāhātmya=Skt.[Śarma])³⁾ MMTがヒンドゥー教との影響関係のもとに成立した聖典であることは、MMT:1.4.b.に見られる「梵卵」(brahmāṇḍa)⁴⁾という用語から推察される。そこで、MMTとヒンドゥー教の女神崇拜の根本聖典とされるDMとの内容を検討した結果、「梵卵」という語とともに、世界創造に関する両者の記述が類似していることが判明した。その所在を示すならば、DMでは、DM:1.43.a-b.,1.47.b.とDM:12.35.a-b.,そして三つの「秘義」の中、DM:「化身の秘義」(Mūrtirahasya). 10.a-b.となり、MMTでは、MMT:1.4.a-b.となる。すなわち、DMとMMTの両文献には、『マハーマーヤー=ヨーガの眠り(yoganidra)』⁵⁾によって、「動・不動の梵卵」が隅々まで遍満されている》といった主旨の類似並行句が存在する。また、「梵卵」を「三界」(trailokya)に置換したMMT:1.6.a-b.も類似並行句と言える⁶⁾。

4. マハーマーヤー尊とマハーマーヤー女神 マハーマーヤーとはいかなるものか⁷⁾。マハーマーヤー尊は、MMT:1.4.c,d.では、①「一切の女神〔たち〕を生起させるもの」、②「ブラフマンなどの中の大いなる本質をもつもの」(bdag ṅid che)」、MMT:1.5.b,c,d.では、それぞれ③「大自在者」(maheśvari)、④「大畏怖者」(mahāraudrā)、⑤「存在物を破壊するもの」(bhūtasamhārakāriṇi)と表現されている。①の「生起」という機能を持つ点はDMにおける創造者としての大女神に通じるものがある。②の下線部はGuのSkt.では「大神通力をもつもの」(mahard-dhikā)と引用されていることから、GuのSkt.と、MMTとGuのTib.の両者で完全な意味の一致をなしていない印象を受ける。しかしながら、大女神の偉大さを称える形容句という点では一致する。最高神シヴァ(Maheśvara)の女性形であり、ドゥルガーを指す③に対応するマハーマーヤー女神のシノニムをDMに求めるならば、DM:1.44.d.の「一切の支配者の中の支配者」(sarveśvareśvari)をはじ

めとして枚挙に暇がない。④の複合語後分 *raudrā* とは *rudra* の派生形であり、*Rudra* とはヴェーダの暴風神ルドラに他ならない。ルドラはヒンドゥー教において最高神シヴァへと昇華される神である。シヴァ神のもつ破壊的な側面はその妃ドゥルガー、カーリーに顕著である。④という語で形容されるマハーマーヤー尊は、シヴァ神の妃ドゥルガーのいわば仏教版である。⑤という形容句もシヴァとドゥルガーの特性に等しい。また、MMT:l.6.c-d.に説くように、マハーマーヤー尊は三界の破壊者であり、創造者でもある。MMTの主尊であるマハーマーヤーの特性がヒンドゥーの女神(大女神)の有する性格とほぼ同様に表現されている点は注目に値する。

5. 結論 ヒンドゥー神話の世界観と大女神の概念が仏教タントラである MMT (MMT:l.4.-l.6.) の成立にかかわっている事実を DM との比較による具体的な用語の考察から見てきた。『秘密集会タントラ』や『ヘーヴァジュラ・タントラ』といったインド後期仏教密教の代表聖典には、MMTに見られるようなヒンドゥー的・プラナー的世界観は明確には説かれない。その冒頭においてヒンドゥー的・プラナー的世界観を大胆に導入した点で、MMTは、ヒンドゥータントラとの影響関係が比較的強いとされる母タントラの中でも、特異な位置にあると言える。MMTの成立年代に関しては、上限をDMが成立したとされる8世紀頃、下限をパーラ王朝時代の学僧、RによるMMTの註釈Guが書かれた時代である11世紀前半頃として、その成立年代を8～11世紀前半頃と推定したい。

【略号と参考文献】 CIHTS: Central Institute of Higher Tibetan Studies. MMT&Gu CIHTS (1992), *Mahāmāyātantram with Guṇavatī by Ratnākaraśānti*, Rare Buddhist Text Series-10, Sarnath. 森 森雅秀 (1992) 「マハーマーヤーの成就法」『密教図像』11, pp.23-43. P: Peking Edition. re-: restored by CIHTS. Śarma Harikṛṣṇa Śarma, (1988(1916)), *Durgāsaptasāhi with Seven Sanskrit Commentaries*, Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, Delhi. Skt.: Sanskrit. 立川 立川武蔵他 (1990 (1980)) 『ヒンドゥーの神々』せりか書房. Tib.: Tibetan Version. 横地 小倉泰・横地優子 (2000) 『ヒンドゥー教の聖典二篇』平凡社.

1) MMTに関しては、CIHTSが作成した re-Skt. が [MMT&Gu] に含まれて存在する。しかしながら、彼らの re-Skt. には、その Tib. との相違矛盾は言うまでもなく、Guで引用される MMTの本文に忠実でない箇所も散見されるなどの問題を含んでいる。したがって、MMTは Skt. が未知であるために、文献として提示できるのは Tib. のみである。本稿においては、[MMT&Gu]を MMT と Gu の当該箇所を指示する便宜を考慮して批判的に使用した。筆者は MMT と Gu の Tib. 校訂テキストを作成しつつ、Gu の Skt. に関しては、CIHTS が使用していない東大写本を参照して再校訂テキストを現在作成中である。

- 2) しかしながら、実質的な内容は MMT:1.4. から説かれる。
- 3) 横地氏は DM の成立年代を 8 世紀頃とし、北インドを成立地とする（〔横地〕 pp.256-261）。なお、5, 6 世紀頃編纂とする説もある（〔立川〕 p.133）。横地氏によれば、DM が独立した聖典として扱われるようになってから附加された「六篇の附属書」の中、後半の三篇（三つの「秘義」）は、9～12 世紀頃成立とされる『ラクシュミー・タントラ』の成立以降、14 世紀までに作られた（〔横地〕 pp.271-272）。
- 4) 「梵卵」という宇宙概念は、『ヴィシュヌ・ブラーナ』などのヒンドゥー教の聖典に登場する（〔横地〕 p.254, note46）。R は、MMT:1.4. に対する註釈において、MMT が説く「梵卵」（R は「梵天の卵」（第六格限定複合語）と「梵という卵」（同格限定複合語）という二通りの複合語解釈を示す）というヒンドゥー教の用語を「法身」と註釈することによって、仏教的に解釈することに力を注いでいる。
- 5) DM:1.41. の記述から、「マハーマーヤー」と「ヨーガの眠り」は同義である。後者の用語自体は MMT では MMT:2.19.b. に確認される。DM において、マハーマーヤーは最初の主人公であり、チャンディーという別名で呼ばれていることもあるけれども、ドゥルガーとも同書においてすでに呼ばれている（〔立川〕 pp.134-138）。いずれも大女神の異称である。大女神あるいは大母神とは最高原理シャクティの体現者であり、最高神に他ならない（〔立川〕 pp.155-156〔横地〕 p.248, note12）。
- 6) 「三界」と「梵卵」は宇宙全体を意味する同義語である。なお、[Śarma] が DM:1.43. b. において、横地氏の採用する jagad etac carācaram という読みではなく、trailokyam sacarācaram という読みを挙げていることは無視できない（[Śarma] p.61〔横地〕 p.269）。MMT では、マハーマーヤーは「三界を成就させるもの」（trailokyasādhani）とされている点は一貫している（MMT:1.7.c., 1.26.b.（注 7 参照））。
- 7) MMT:1.26. に対する R の註釈には、マハーマーヤーという尊格（devatā）の威力（prabhāva）と自性（svabhāva）に対する問いが存在するけれども、このような問いは、DM :1.45.-1.46. におけるマハーマーヤーという女神（devi）の威力と姿（svarūpa）に対するスラタ王の聖仙への問いと類似している。マハーマーヤー尊のもつ威力と自性の両者に対する R の答えは、それぞれ MMT:1.26.b, c-d. に説く「三界を成就させる」（trailokyasādhaniṁ）、「大瑜伽行者たちにとって神聖な」（mahāyogināṁ divyam）であり、このような威力と自性をもつマハーマーヤー尊は MMT:1.7.c. に説く「明妃」（vidyā）に他ならない。R は MMT:1.5., 1.6. に対する註釈において、マハーマーヤーの「マーヤー」を通俗語源解的にそれぞれ「破壊」と「創造」の二義に解している。前者は MMT:1.5.d.（=⑤）を念頭に置いている。後者は MMT:1.6.d. の「三界を再び創造する」（'jig rten gsum po yaṅ spro 'o=srjate）に引きずられた解釈である。マハーマーヤーとは「大いなる破壊と創造をなすもの」とでもいうことになるうか。

〈キーワード〉 *Mahāmāyātānttra*（= MMT）, *Ratnākaraśānti*（= R）, *Guṇavatī*（= Gu）,
Devīmāhātmya（= DM）, 梵卵, マハーマーヤー, ヨーガの眠り, 大女神, 三界
 （京都大学大学院）

respectively for progressive tantric practitioners.

78. A Reconsideration of Vijñapti

Shintarō KITANO

Prof. Hiromi Yoshimura says that *vijñapti* in the *Madhyāntavibhāga* (= MV) I.3 known through the preaching of the “four manifestations” is used with a meaning different from that found in the *Mahāyānasamgraha*, *Viṃśatikā*, and *Triṃśikā*. This is due to the fact that *vijñapti* in MV I.3 does not convey a mediating subject or object of cognition. However, it is said that *ālayavijñāna* possesses cognition (= *vijñapti*) in both directions, inside and outside, according to a passage which describes the “proof of the existence of *ālayavijñāna*” in the *Viniścayasamgrahaṇī* of the *Yogācārabhūmi*. Taking the ideological influence of the *Viniścayasamgrahaṇī* into account, one may suppose that the author of the MV I.3 expressed “*bhājana-vijñapti* and *āśraya-vijñapti*” which originally meant direct cognition of *ālayavijñāna* through the contracted expressions of “*artha* and *sattva*”. In that case, *āśraya-vijñapti* would correspond to individual existence, while *bhājana-vijñapti* would correspond to the surrounding world, meaning that between the two, the relation of the subject and object of cognition is confirmed. As a result of the above-mentioned examination, in MV I.3, “*vijñapti* extending over a subject and object of cognition” is expressed through words different from *vijñapti*.

79. On the Mahāmāyātānta

Jishō ŌMI

The *Mahāmāyātānta* (abbr. MMT) is classified by Bu-ston as a yoginītantra. This tantra consists of three chapters and has two other titles, Parama-guhya and Mahāguhya. Ratnākaraśānti (ca. 10c.-11c.) wrote a commentary on this tantra, entitled *Guṇavatī*. According to his commentary, the fact that the opening word is “*atha*” indicates that this tantra is a kind of ākhyātatantra or uttāratānta (explanatory or supplementary tantra). In the present paper, I

try to establish the relationship between the MMT and the *Devīmāhātmya* (abbr. DM), a basic Hindu text of worship of the Goddess, through the analysis of the word “brahmāṇḍa” in the MMT (chap. 1, verse 4) and in the DM and of some adjectives used to describe the deity, Mahāmāyā (MMT chap. 1, verse 4-6). According to my hypothesis, the MMT was composed between the eighth and eleventh centuries.

80. On the Āditajātaka from Palm Leaf Manuscripts kept in Otani University: A comparative study with the Burmese (Zimmé) and Northern Thai (Lanna) recensions

Hiroyuki MURANISHI

There exist at least three recensions (Burmese, Laotian & Cambodian) of the *Paññāsajātaka*, which is a collection of 50 non-canonical jātakas unique to South East Asia. The Burmese recension was published first in 1981 by P. S. Jaini in the PTS series (No.172) as “*Paññāsa-Jātaka or Zimmé Paññāsa*”. In 1998, Chiang Mai University edited and published “*A Critical Study of Northern Thai Version of Panyasa Jātaka*”. Otani University has long held many palm-leaf manuscripts in Khmer script, in which we found 27 stories originated from *Paññāsajātaka*. Here, I make a comparative study of the Otani version of the Āditajātaka with the equivalent story in the Burmese recension: Ādittarājajātaka (No.1) and the Northern Thai version: Ādittarājajātaka (No.43). The Āditajātaka is a story of gift-giving (dāna). The king Ādita gives his beloved queen to a Brahman hoping that he will be a buddha in future. The author seems to have composed this story based on the famous Vessantarajātaka (No.547). Comparing these four texts, I conclude that the Northern Thai version seems to show the oldest style and image of the *Paññāsajātaka*.

81. The Relationship between *vastu* and *nimitta* in the *Yogācārabhūmi*

Taiki MOTOMURA